

---

# 僕が弁天様ッ！！??

号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕が弁天様ツ！！??

### 【Nコード】

N5142B

### 【作者名】

罇

### 【あらすじ】

何の変哲も無く、普通に暮らしていたとつても不満だが”美少女”な僕。水咲瑞樹。17歳。そんなある日の帰宅時、僕に人生初かもしれない不幸？が降り注ぐ・・・

## そのぜろ：プロローグ・・・かな？byミスキ

僕って言う人間は生まれてこの方、一度も史上最悪の不幸と言うものに出会った事がない、あっぱれな人間だと思う。

それってつまりは、世間一般で言われる平穏で普通の毎日を送っていたって訳で。

それなりの不幸とその分対極の幸福はあったと思うし、兎に角バランスの良い人生を生きてきた。

・  
確かにそんな人生に暇だとか不平不満は無いことも無いのだけど・

僕にはそんな運命っていうのを変える超能力やら不思議な力がある訳ではないのでどうしようもない。

それに、普通が一番だと自覚しているのは、何を隠そう僕自身なので

このまま、何事もなく幸福もあり不幸もありの人生を送って最後は温かい布団で静かに死にたいかな？なんて。

以上、僕の夢でした 終わり。 ちゃんちゃん

2年2組

水咲 ミスサキ

瑞樹 ミスキ



「……で？真面目に書いたのがソレか？」

「もちです」

相当ドスの聞いた声で、先生が僕に尋ねてくる。

何をそんなに怒っているのか、分からないけど……

そんなのお構い無しに明るく即答する僕。

ふむ、僕ながら素晴らしい作文だ。どっかのコンクールにでも持って行きたいな。

入賞間違いなし

つと、自己紹介が遅れました。

僕の名前は水咲<sup>ミズサキ</sup> 瑞樹<sup>ミズキ</sup>です。あ、読みにくいなんてのは言わないで。

年は最近17才になったばかりです。あと一年で大人の世界に堂々と仲間入りです。

只今、なんだか分かんないんだけど、突然職員室に呼び出されて……

何の用事かと思えば、先生は僕が以前書いた革命的素晴らしい作文を僕に差し出してきた。

で、音読しろと命令してきたので音読した訳なのだけど……  
何故かご立腹のご様子。という状況である。

「じゃー聞くが、何故に『自然と人間の共存』と言うテーマが僕の夢に変わっているんだ？」

「書きたかったからですか？」

「俺に聞くな!!!」

どうやら先生はお疲れの様子。カルシウムが足りないのかなあ？  
今度、牛乳くらい奢ってあげよ。それぐらいの経費はあるし。

「先生。あんまり怒ると血圧が。」

「・・・誰のせいだと、思っているんだ・・・」

「誰だ！！؟؟先生を困らしているのは！！??？」

まったくけしからんとどつかのオヤジみたいな台詞を付けくわえて  
僕は職員室で叫ぶ。

「・・・もういい。教室に戻れ。」

何故だか先生は泣きそうだ。ここで黙ってハンカチを差し出せば僕  
も大した大人の仲間入りなんだろうが、  
生憎そんなのは持ち合わせていないので、まあ〜ドンマイ。

仕方ないので・・・無視して教室に帰ることに。  
アディオス、先生。

「なんだっ たんだ？呼び出し。」

そうして、教室に戻ると少し仲の良い友達・・・仮にA君とでも呼  
ぼうか。

そう、少し仲の良い友達A君が話しかけてきた。

「A君!!!??扱いヒドっ!!!」

「だって陰キャラだもん」

命一杯の笑顔を向けてやった。

A君はシヨックを受けているものの、何故か頬が赤いきもっ!!!

「・・・お前って、そんな性格じゃなけりゃ・・・完璧な”美少女”なのにぐじゅじけぶへらっつっつ!!!??」

「・・・殺されたい？」

「・・・も、もう半殺ひでふ・・・」

A君の身に何があつたかはあえて言つまい。

ヒントは僕が肉体的制裁を与えたってぐらいだ。つたく、どいつもこいつも。

あゝ・・・ちなみに素直で良い子のみんなには一応言つとくけど、僕は真正正銘の男だ。

決して、僕って言う一人称を使っている女の子ではないぞ。そこんとこ宜しく。

でだ。認めたくないが僕って世間の目から見れば、誰もが振り返る美少女らしいのだ。

なんて最悪、なんて不幸。さっきの作文じゃないけど、唯一不幸と呼べる代物かもしれない。

何の得も無いこの姿。さらには声も一般男子より高めだし、身長も・・・高くない。

変な男共にはストーキングされたりとか、体育の時の男子更衣室での着替えとかをヤバイ視線で見られたりとか、靴箱には、男のラブレターが入っていたり。

男としての自信喪失。プラス人生辞めたくなる様な事ばっかだ。

一体、誰がこんな姿にしたんだと叫んでみても、やっぱりその犯人は僕の両親だったり。

しかも、その両親は両親で僕を女の子として育てたかったんだとか・・・

小学校ぐらいまでは服を母さんに買ってきて貰っていたのだが、全部が全部女の子用だった過去もある。

隣に住むのおばさんとかも僕が中学で学ランを着るまで、女の子だと思っていたらしい。

いい迷惑だよ・・・ほんと。

それでも、僕は作文通りまあ〜それなりにと言っちゃんだけど、普通の人生を送ってきたつもり。

わざわざ高い金出して整形したいとも思わないしさ。

そんな訳で、これからも普通の人生を送るだろうなあ〜なんて物思いにふけっていたりしたのだが・・・

・・・そんな思いは放課後、カッコ良く言えば疾風の如く見事に消え去った。

今日の授業が全て終わり、教室から次々と生徒が出て行く。  
今から部活動に励む者や、何の用事もない奴など様々。  
ちなみに僕は後者。居残りする理由がこれっぽっちもないのでそそくさと鞆を持ち、帰る。

家までの道をのんびり歩く。僕は結構こういつた歩いている時の景色とかが好きだ。

犬を連れて歩くおばさんやお爺さん、ぺちゃくちゃと駄弁りながら歩く女子高生、

本屋で立ち読みしている人、颯爽さっそうと道路を走る自動車、たまに前を通り過ぎる野良猫、手を繋いで楽しそうな親子。

何の変哲も無いそんな景色。いつもと変わらない日常を僕はこの上なく愛している。

いや、愛しているとまで大袈裟じゃないけど、それに近いくらいの感情はあるかな。

なんてナルっぱい事を一人で考えながら、気がつけば僕は家の前に突っ立っていた。

いつも通り、ドアを開け・・・様としたが、生憎あいにく鍵が閉まっていた。母さんは買い物だろうか？と、いつも帰宅を出迎えてくれる人物を考えながら、鞆から鍵を取り出し

鍵を開け、家に入る。

「ただいまあゝ・・・っていないんだっけ」

と、一人で悲しく突っ込みをしながら靴を脱ぎリビングへ向かった。さっきのナルっぱい思考・・・声に出してなかったら良いけど・・・もし、出てたなら危ない人だと思われたらどうなあゝ・・・

なんて考えながら、リビングのドアを開けた。  
が、そこのは・・・何もなかった。

「・・・・・・・・はい？」

思わず声が出る。

ホントに何も無いという表現が相応しい状態だった。  
つーか、テーブルは？ソファは？テレビは？冷蔵庫や家族分の食器、  
電子レンジは？

先週買ったばかりに絨毯や母さんお気に入りの壁に掛けていた絵は？  
全部無い。どこにもない。何も無い。

「何の冗談？ドッキリですか？どっかで僕が驚く姿を見て笑ってる  
んでしょ？」

僕はそれが本能であるかの様に家中を走り回った。

洗面所、トイレ、客間、両親の部屋、物置化された部屋。

その全てに何もなかった。

今までと変わらないのは僕の部屋だけだった。

「・・・・・・・・まじで？」

うわぁ・・・泣きそう、僕。

思わず、棒立ちになる。

やばいってこの状況。つーか親父や母さんはどうしたんだろう？

何か手がかりとか無いかなぁ・・・大掛かりな泥棒って訳でも  
無さそうだし。

そう思い、もう一度リビングに戻る。

そしてもう一度リビングをまんべん無く見渡す。

「んんんんんん…何も無いか…んん？」

が、部屋の真ん中に一枚の紙があった。ってかさつき気付けよ僕。その紙はなんだか手紙みたい…

「読むしかないよね。」

折りたたまれていた紙を丁寧に開き、文字に眼を通す。そこには…

~~~~~

やっぱり 瑞樹。学校終わったか？愛しのパパですよ

で、今のその状況。めちゃくちゃ驚いてるだろうと思うけど、簡単に言えば、父さんが働いていた会社が潰れちゃったのさ。

さらには、俺にゼロが一杯ある借金もできちゃった訳。

その家とそこにあつた家具などを全部売ったけど…

全然足りねえや マズイね、こりゃ。

そんな訳で俺と母さんはその借金返済の為、ちょっと行って来ます。

暫く時間はかかると思うけど、それまで頑張ってくれたまえ

でだ。その暫くの間、瑞樹にはある場所に住んでほしい。

俺の知り合いに頼んだんだが、瑞樹にはソコに住んでもらいたい。

場所はこの紙の裏に書いてるから、大丈夫さ。

ま、そんな訳で転校もしてもらおう。あ、もう手続きは済んだから安心しろ

瑞樹も瑞樹で大変だと思うが、達者でな

あ、早くその家から出てかないと怖ああいお兄さん達がやってくるから、気をつけるように

以上。

~~~~~

「……愛しのパパより……か。どうでもいいけど、大の大人が書く文章じゃないよなあ。」

つて、そんな事より!!借金!!??なんで会社の大した役柄じゃなかった親父が借金なんか!!!

うわあ……何これ?今度こそ泣いて良いの?

これこそ……

「……人生最大の不幸じゃん」

まさかこんなシナリオが用意されていたなんて……予想外にもほどがあるって。

いっそのまま人生を回れ右して逃げ出したいよ……  
漫画とかじゃないけど、マジでトホホって感じ。

まあ〜でも兎に角。マイナス思考になっても仕方ないか。早くしないと怖いお兄さんがやってくるらしいし。えと……これからどうしよう……あ、住む場所か。

そう思いつき、紙の裏の地図をみる。

そこにはその住所と……落書きがあった。

地図などでは無く、落書き。どっかの文明の古代文字を解読するほうが簡単と思われる、地図らしからぬ落書きがそこにはあった。

今時、3歳児ぐらいいでもこれ以上は描けるだろうさ。

ま、住所はちゃんとかかれていますみたいだから近くまでは行けるか。そこから人に聞けば大丈夫だろう。

住所には『七福荘』と書かれている。シチフクソウ

変わった名前だなあ。アパートかなにかなのだろうけど。

まあ……そうと決まれば、まずは荷造りからだな。

……と。う〜ん、なんだか楽しくなってきたのは気のせいだろうか？

コレって僕にしたら大した不幸じゃないのかなあ？

「それならそれでいいけどさ。」

それから僕は隣のオバサンにガムテープや要らなくなったダンボールなどをたんまりもらい荷造りを始めた。心なしか鼻歌を奏でながら……

そのいち：ツンデレ候補ちゃうわー！byサツキ

「へい、彼女お〜・・・暇なら俺っちとお茶なんてどお？」

うわぁ・・・痛すぎて笑う気にもならない口説き文句だな、おい。  
初めて聞いたってこんな台詞。

思わず昭和の人ですか？って聞きたくなるよ、ホント。  
これでナンパ成功したら、ギネスブックに載るんじゃない？

「えと・・・急いでるんで。」

それに対してなんてことを口走ってるんだかこの僕は。

これこそ本当にナンパされてる”女の子”が使うもんじゃないか。  
もつと良い断り方は無かったのか、僕。

「そんな事言わずにさあ〜・・・奢ってあげるしい」

と、いきなりナンパ男は逃げようとする僕の二の腕辺りを掴んでき  
た。

つてか、痛ぁ！！キャラによらずなんて握力してんだよ、この昭和  
人！！

くっそ！！振り解けないい・・・

「おい！！放せつての！！それにだな、まことに残念ながら僕は男  
だ！！！」

「お、男・・・？」

お？効果観面？  
こうかてきめん

さすがに男相手にナンパしたのはショックだったか？  
と、安堵したのも束の間・・・

「そー男なの。わかつたら手を離し・・・」

「・・・男も・・・興味アリ」

うわあ〜い 残念ながら、あっち系の人みたいだ（泣  
ちよつと、ちよつとちよつと！！なんて心の中で某双子芸人のツツ  
コミが聞こえてくるし。

それにしても、マジでやばいかもコノ状況。

このナンパ野郎、僕より数段力もあるみたいだし、逃げようにも捕  
まってる時既に遅しだし・・・

誰か助けてよ・・・まじで。今ならお約束のスーパーマンやらヒーロ  
ーとか登場しても、

ツツコミ無しで対応するからさ！！

そもそもなんでこんな状況になっているかと言つとだな。

それはそれは数時間前の事・・・

「・・・やつと着いたあ けど・・・」

電車、バスなどのちよつぴり近代的な乗り物に揺られて約5時間あ  
まり。

僕は、今見慣れない地域の駅前に居たりする。

置手紙に書かれていた住所を頼りに大まかな場所を特定してここま

で着ただけけど・・・  
ここからがさっぱり解らない。  
本当ならここから地図を使って目的地に行く筈なのだ。

が！その頼みの綱の地図が人類が滅亡しても解読不能な為、行き詰  
つてる訳である。

少し向こうの方に住宅街らしい場所が見えるけど・・・あの辺り  
かな？

「あんの・・・くそ親父いゝ地図がキチンとしてたら迷わず直行な  
のにさ」

兎に角、立ち止まっても仕方ないので、今いる場所をゆったり  
と歩きながら町並みを見渡してみる。

なんて言うか、前に住んでた所よりもちよつとだけ田舎っぽい感じ  
はするんだけど・・・

なかなか良い場所だと思った。簡潔に言ったらぼわぼわしてて温か  
い感じのする町。

暫く歩くと商店街らしき場所には、人が溢れていて活気立っている。  
商店街の入り口辺りにある看板には、『宝舟商店街』と書かれてい  
る。（変わった名前だなあ

ところで、さつき遠目で見えた住宅街らしい所にはこの宝船商店街  
を抜ければ行けそうなので、  
止まる事無く突き抜けていく。

食材店は勿論の事、本屋やCDショップ、雑貨屋や衣服店などもあ  
ったりするので、

この辺りのほとんどの人々は、この商店街を活用しているみたい。

例えばそうだなあ・・・

と、視線が一軒の魚屋さんに止まった。

そこには美少女と言うよりは美女といった方が相応しい女性が魚屋のおっちゃんと大きな鯛をめぐり、争っていた。

「そこを何とかならない？今日、お客さんが来るのよ・・・ダメかしら？」

「てやんでい！いくらシズカちゃんの頼みであってもタダでこの鯛を渡すわけにやゝいかねえってもんだ。」

おいおい。タダで貰おうって頼んでたのかよ、あの女性もといシズカさん。

それはいくら何でも無謀なんじゃ・・・しかし・・・彼女は自信満々にニヤリと笑い返す。

「あ、そう言えば知ってるかしら？最近、宝船銭湯の女湯でなんか生臭い覗き魔が出たらしいわよ？」

その言葉に一瞬ビクツツとする魚屋のおっちゃん。シズカさんと呼ばれる女性は魅惑的な唇をおもしろい悪戯を考え付いた様にさらにニヤニヤ度が増す。そして、どこからか写真を取り出しチラつかせる

「んなあ！！??何故にそげな写真があ！！??？」

「ふふ・・・この写真、危うく落としちゃうかもねえ 私ってドジだから」

「く・・・も、もってけ泥棒う！！（泣）」

「あら？いいの？今日わ気前が良いのね あ、あとその鮭7匹ほども頂けるかしら？」

「え？さすがにそれは・・・」

泣きそうなおっちゃん。しかし、シズカさんは追い討ちをかけるかの如く、

近場にいたオバサンにテテテッと小走りで走り寄り、

「先日の覗き魔って実はさかn・・・」

「どうぞ。お納めください。」

「ふふ」

なんてシズカさんは、明日のジョーみたいに白くなっている魚屋の主人を

完全に無視しているかの様に、ありがとう などとお礼を言い上機嫌に鼻歌なんか歌いながら戦利品を受け取り住宅街の方に去っていった。

・・・なんかブラックな取引を目撃してしまった。

こんなの毎日、日常茶飯事的に行われていると思うとぞつとする。

僕も気をつけようと心に決め、先ほどの女性と同じほづに歩き出す。

そんなこんなで商店街を右左に観察しながら、ダラダラと歩く事30分。

やっとこさ目前に住宅街が見えてきた。

大通りみたいな道を挟んで、左右に家が並んでいる感じだ。

さらにその大通りは、ちょっととした上り坂になっていて、自転車な

どで上からノンブレイキで降りてきたら、  
気持ち良いだろうなあ〜なんて思わせるぐらい急すぎず、緩やかすぎずといった具合。

「……と。この辺りかなあ？」

『七福荘』なんて変わった名前だし、人に聞けばすぐ見つかるかも  
5人ぐらい尋ねたら1人くらい知ってるだろう。

そう思い、近くに歩いていたら恐らく買い物帰りに主婦の方に話しかける。

「あのお〜……突然ですいませんが……『七福荘』ってどこにあるか知りませんか？」

「ん？あらあらああ これまた可愛らしい子ねえ 『七福荘』？  
ならこの坂の一番上にあるわよ？」

速攻で見つけた。これは予想外です。ソフトバンクCM風  
ま、それならそれに越したことは無いけどさ。

可愛いと言う一言に一瞬ピクリとした僕だったが、  
不機嫌になるのを抑え、その人にお礼の言葉を一言交わし、坂を上り始める。

一番上まで半分くらい着たかな？ってところで……

「へい、彼女（以下略）」

……で、今に至る訳だ。

つてか過去なんかを振り返ってる場合じゃねえ!!

ほんとのほんとに誰かあゝ!!(泣

助けてくれたら、今ポケットに入っている最後の飴ちゃんを上げるから!!

「さあさあ 俺と禁断の愛の巣へ ぐふふふふひ・・・ぐへらあ  
!!」

と、ナンパ男が気色悪い笑い声の途中で意味不明な言語を叫び、前方へ飛ばされた。

どうやら、後ろから誰かに背中辺りを蹴り飛ばされたらしい。

太陽からの逆光で顔は判別にしにくいけど・・・どうやら少し小柄な女の子みいだ。

女の子??マツチヨなヒーローとか、どっかのぎやるげー主人公とかじゃ無くて?

起き上がるナンパ男。

「へいへいへい!!いきなり蹴りかますなんて、いい度胸じゃ無えか?ああ?」

「うっさいわ、ボケエ!!こんな可愛え美少女を拉致しようとしてはるボケナス野朗なんか

蹴りかます前の挨拶なんか、いらんのじゃ!!」

「あの・・・僕は少女じゃなくて一応男・・・」

「もう安心してええからな。ウチがこんなボケナスへたれ野朗なん

て、ポッコボコの  
顔にタダで整形手術したる。」

聞いてないし。それにしても素晴らしくバイオレンスな女の子だなあ。

言動も行動もどっちも。

ってか、大丈夫なんだろう？僕より小さいし女の子だし、何より相手のナンパ男が意外と強かったりするし・・・  
そして・・・僕の立場は？

「てめえみたいなガキンチョがこの俺つちに勝てるっても？」

「はんつ。アンタみたいなボケナスへたれインキンタムシなんかに負ける気なんか、ミジンコも無いわ。」

そう言うどどちらも相手との間合いをシュタツとバックステップでとり、どっかの格闘技選手みたいに構える。

どうでも良いけど、バイオレンス少女がナンパ男のあだ名を一言言うたびに酷くなってない？

ともかく。二人は暫く睨み合う。

刹那

「だしゃ　　ッ！！」

と、ナンパ野郎が間抜けで雑魚キャラ的な叫びと共にバイオレンス少女に突進していく。

そして射程範囲に入ったのか容赦なく拳を繰り出す。

が、そのバイオレンス少女に直撃する事は無く、

片手で虫を相手にしているかの様に軽々とその拳を止めていた。

「な!!!???」

「これで 終わりや」

そう言うと、バイオレンス少女は空いた方の拳でナンパ男の顔を一発殴る。

すると、どうだろう?おもしろいくらいにナンパ男は吹き飛び、さっきまで僕がいた商店街のところまで坂道をゴロゴロと転がっていった。

つて!!強っ!!なんか僕、素で解説してたけどハンパネエよ、彼女。

しかもよく見ればこれまた美少女だし。

短めの髪だけど、それがまた彼女に似合っていて可愛い。

とてもじゃないけど、大の男を一発殴って吹き飛ばす様な子には到底見えない。

と、僕が熱心に彼女の事を見ていたのか、その視線に気付いた彼女は僕に小走りで寄ってきた。  
なんか小動物みたい。

「大丈夫やった?なんやさっきの奴に変な事されて無いかあ?」

「あ、うん。大丈夫みたい・・・ありがとう、助けてくれて」

やっぱり命とまではいかないけど、恩人なので精一杯の笑顔と言葉を向ける。

「うえ！！???. . . い、い、いやウチは当然の事をしただけやし  
！！」

何故か顔を赤く染め焦りだす彼女。

「そ、それに今日は誰でも良いから殴りたい気分やったしさ、あは  
は」

つて、おい. . . . それはダメだろ普通に考えて。笑うとこじゃな  
いって。

だとしたら、もしあのナンパ男が居なかったら見境無しに誰か殴っ  
てたって事？

無差別殴り魔と遭遇したんですか、僕は。

なんて身の危険を感じ、警戒してる僕に彼女はさっきより落ち着い  
たのか安定した感じで

一度大きな溜め息をつき、「そんなことより. . . 」と前置きをそえ  
て話しかけてきた。

「キミみたいな可愛い子、この近くに住んでたら嫌でも目に入って  
記憶から放れへん筈やねんけど. . . 」

もしかしてこの辺りに住んでなかったりする？」

「あ、今日コツチに引越して来たから。多分アソコに」

と、坂の一番上に微かに見える建物を指差し僕は答える。確定は無  
いけど。

あ、ってか彼女まだ僕の事女の子だと思ってるみたい。

「アソコって. . . . もしかして『七福荘』！！???」

「え？あ、うん。そうだと思うけど・・・」

「嘘お！？じゃあじゃあ、キミが新しく引っ越してくる『水咲瑞樹』ちゃん？」

「水咲瑞樹は確かに僕だけど？」

「なんだかテンション高いなあ。」

「ん？待てよ？今の反応的にもしかして彼女も・・・」

「やつぱ、そうなんやあ　ウチ、瀬毘紗月　ウチもあの七福荘に住んでるねん」

「ビンゴみたい。って事は何か？」

「僕は今日から毎日、この無差別殴り魔少女もといセビサツキちゃん（どんな漢字書くんのだろ？）とのデンジャラスな生活を送らないとダメなのか？」

「僕の人生の終焉も近いみたい（泣）」

「と、僕が人生の儂はかなさを悟っているとサツキちゃんがそれにしても・・・と話しかけてきた。」

「水咲瑞樹なんて名前やから、てっきり男やと思っててんけど・・・まさか、こんな可愛え女の子やったなんて。」

「あ、うん・・・その事なんだけど僕はおとく」

「でも！！女の子で良かった　ウチ、男って大大大大　嫌いッやねん！」

もし水咲瑞樹が男やったら・・・十発くらい鉄拳食らわせやな気が済まへん！！」

・・・さっきの人生の終焉も近いつて話、

冗談じゃないかも・・・(泣)

このまま黙つてた方がいいのかな？・・・どうしよ？

でも、同じ屋根の下、いつまでも隠し通せる訳じゃないし・・・

よし！

「あ、あのさ、非常に言い難いんだけど・・・実は僕・・・おとく

」

「あー！やばあ！そろそろ『劇場版！超絶変態 ドドンガー』カ

ップラーメンの逆襲』が始まる時間やん！

こうしちやいられん！！」

そつまた僕の台詞の途中で急に割り込んできたかと思えば、僕の右手首を強引に掴み

グイッつと引っ張る。あんまり人の話聞くタイプじゃないみたいだな。

どうでもいいけど、なんて番組だよ。それに一体何したらカップラーメンに恨み買う様な真似を・・・

「ほな、超特急でいくで瑞樹ちゃん」

と、さっきよりも強引に人の力じゃアリエナイ位のスピードと怪力で僕を引きずり

走り出した。

つて！！

「え・・・ち、ちよ！！サ、サツキちゃ・・・ちよつと・・・まっ・・・  
・あああああああああ」

その後、僕は当初の目的地『七福荘』に着いた訳だが・・・  
結局、僕は気を失っており、気がついたのはこの一時間後となる。

そのいち…ツンデレ候補ちゃんわー!!bYサツキ(後書き)

宜しければ評価の方、お願いしますw

それに：得意料理は、肉じゃがです byアヤノ

ふと、気がつけばソコは見たことも無い部屋で。

どんな感じかと聞かれれば某猫型ロボット漫画の主人公のイエロー  
ニート（のび 君の事）の部屋に

少し似ている素朴な畳の部屋としか言う言葉が出てこない。

が、広さは結構なもので独り暮らしは勿論、二人暮らしでも十分に  
余るくらいのスペースはある。

小さなキッチンと押入れもあるみたい。テレビや冷蔵庫もちゃんと  
ある。

「・・・で、そんな事よりココドコ？」

そして、僕は何故こんな見知らぬ部屋の中央に敷かれた布団で寝て  
いたのだろうか？

なんだか・・・体がダルイ・・・というか痛いし・・・  
意外と大きな窓を見てみれば、外はもう真っ暗。

じっとしていても仕方が無いので、体が多少痛いのを我慢して  
ムクツと体を起こす。

同時に今まで存在感ゼロだったドアから、コンコンとノックの音と  
共に女の声が聞こえてきた。

「あのおく・・・起きてますかあ??入りますよお？」

「あ、ああ開いてますよ!」

急にだったのでちょっと声が裏返った・・・恥ずかしい・・・

「じゃ・・・お邪魔します」

が、そんな僕の心境を知ってか知らずか、ドアの向こう声の主はお構いなしに入ってくる。

・・・な・・・なんだか一人で恥ずかしがってた僕がまた恥ずかしい  
(泣)

「おはようございます もうお体は大丈夫ですか？」

なんてにつこりスマイルがとてつもなく似合う同い年くらいの女の子が

何個かオニギリを載せた台を持って中に入ってきた。ちなみにこの子も半端無く可愛い。

枝毛なんて一本無さそうな黒髪を後ろで縛っている。いわゆるポニー  
ーってやつ。

パチクリした少し大きめの瞳。とても透き通っていて僕のアホけた顔もよくわかる。

なんだかおっとりしている感じ。和風美人ってやつだ。

つてか、ホントに今日わ美女、美少女と良く会う。呪われてんのかな???

ま、別にいいけど。

「え、あ、えと・・・大丈夫みたいです。」

「そうですかぁ 白目をむいて、泡を口からふいていたからとても心配しましたよ」

大事に至らなくて良かったです と、言葉を添えて本日二発目の秒殺につこりスマイル。

こんなの見たら、同性でも惹かれるだろうなあ。実際、異性の僕はかなりやばい。

つて待て。僕はそんな惨めで悲惨で怪奇な状態で寝てたの!!!?? しかも、それって相当危なかったんじゃ・・・

「はは、じゃ〜気持ち悪かったでしょ？僕？」

「ふふ、そうですね かなり」

「そこは嘘でも、そうじゃないって言うてくださいよ!!--」

自分から話題振っとしてアレだけど、僕の心がたつた一言でスタズタ・・・

しかも、こんな可愛い子に言われたらさらに攻撃力増。

「え？えと・・・多少気持ち悪かったです？」

「・・・」

「ん〜・・・それなりに気持ち悪かったです？」

「・・・」

「むっ……あ……兎に角、気持ち悪かったです」

「……もう、いいですよ……」

「あ……！分かりましたあ！」

お？自信満々つばい……今度こそ……

「とても気持ち良かったです」

「とてつもない誤解が生まれるので、止めて？」

顔に似合わずなんて事口走るんですか、この子。

律儀に使ってた敬語も思わずどっか飛んでいったよ。

「ふふ、面白い方ですね」

「あなたほどじゃないですよ？」

「あ お腹空いてませんか？オニギリ作っただんですけど？」

……スルーですか。

かなりの強敵と見た。

「あ、ありがとう……ってかココってドコ？」

折角なので、今僕が置かれている状況をオニギリを食べながら教えてもらおう事に。

……おいしい

「ココですか？ここは鶴亀さんの部屋ですよ？」

いや、鶴亀さん知らねえし。

極端すぎるだろ、その説明。

なんか疲れるなあ〜この子……

「えっと……じゃ〜なんで僕ココで寝てたの？」

と、聞くと彼女は可愛らしく、人差し指を立てて首を傾げながら少し考え……

「玄関から一番近い部屋だったからですか？」

「そついう事じゃなくてえ！ん〜……」

なんて言えば通じるんだろ……

誰かヘルプ求む！！（泣

なんて、そんな願いが通じたのか突然、ドアが開き途轍トレンもない勢いで誰かが入ってきた。

その子は僕をナンパ野郎から救ってくれたセビサツキちゃんだった。忘れるはずも無いだろう……あんなインパクト強かったら……しかし……なんだか彼女を見ていると自然と体が勝手に逃げようとしているのは何故??

「瑞樹ちゃん!!」

彼女わ目に涙一杯溜め僕にダイブしながら抱きついた来た。

「ちよ!?!」

「瑞樹ちゃん!?!起きた!?!ほんまごめんなあ!?!ウチ手加減で良く分からなくて、たまにやり過ぎる癖があつて・・・」

「凄いやだな、ソレ。それが分かつてるのにも関わらず、この抱きしめる強さは何??」

「むしろ締め付けられてる感じがするのは、僕だけでしょうか? (汗汗でも、一部分はちよつと柔らかかったり・・・」

「んゝ・・・段々思い出してきたぞ・・・えつと・・・」

「でもな!!今日のドドンガーはメツチャおもろかつてん ああゝ瑞樹ちゃんにも見せたかつたわ・・・」

「・・・思い出し終了・・・」

「つてか人一人、気絶させてもドドンガーは見るんだ・・・」

「ん?て事は・・・」

「ここつてもしかして・・・『七福荘』??」

「そつですよ?言つてませんでしたっけ?」

「聞いてませんよ」

「あ！そういえばまだ自己紹介がまだでしたね。私は黒峰<sup>クロミネ</sup>絢乃<sup>アヤノ</sup>って  
います 宜しくです

大黒天の名を持っていてココでは料理担当させてもらってます」

この子は自分の不利になる時はスルーする性格らしい・・・  
これがわざとじゃなくて天然なら国宝級だけど・・・

「ん??ちよつと待って?今、意味不明というか理解不能な言語が  
聞こえた気が・・・」

「何がですか?」

「いや・・・大黒天がどうか・・・それにココってアパートだよ  
ね?なのに料理担当って・・・」

「えと・・・私はそう言う説明とか苦手なのでサツキちゃんにパス  
です」

「ウチ!?!??ウチも苦手やねんけどなあ・・・」

とブツブツ言いながらもゴホンと一回咳をし、説明し始める。  
つてか、いつまで抱きついてるんですか?

「んとおく・・・瑞樹ちゃんはここの名前知つとるよなあ?」

僕は頷く。

「うん。『七福荘』だよな?」

「そや。大正解。で、その『七福荘』の七福の意味はそのまんまで

『七福神』の事をさしてるねん。

弁財天、大黒天、恵比寿、毘沙門天、福祿寿、布袋、寿老人の七人の神様。で、この『七福荘』ではその名前を使った部屋があるんや。ただ・・・」

「ただ??」

「その部屋を使う人はその名前にあった人じゃないと。つまり・・・その神様の生まれ変わりの人じゃないとアカンねん。」

「・・・はい?う、生まれ変わりって・・・」

そんな夢、幻想みたいな話・・・

「信じられへんのも分かる。でも、ほんまやねん。例えばやなあ・・・」

と紗月ちゃんは瞼を静かに閉じ、右手を天井に掲げた。

すると、目開けるのもやつとと言うぐらいの眩しい光が部屋中に覆った。

そして、一瞬にしてその光が消えたかと思いきや・・・紗月ちゃんの天井に掲げられた右手には2メートルほどの・・・

「・・・や、槍??」

「ちゃうちゃう。矛や矛。どや?凄いやろ?」

片手で軽々とブンブンと矛をバトンみたいに振り回す女の子が一人

(汗)

「凄いというか・・・どんな手品使ったの??」

ほんとビックリ。ミスターマリックやらプリンセステンコウ並に尊敬しちゃうかも。

ってかその槍・・・じゃなくて矛・・・刃の部分良くみたら本物みたい・・・

紗月ちゃんがこれもって暴れでもしたら日本。。いや地球壊滅も戯言ですまないだろうなあ・・・

紗月ちゃん・・・銃とか大砲とかくらくらっても死にそうじゃないもんなあ

「手品ちゃうって!!これが七福神の生まれ変わりが持つ能力やねん。ちなみにウチは毘沙門天、武神の名を持つてるんや」

なるほど、それであの怪力と矛か。

でも、やっぱりまだ信じられないよなあ・・・僕てそんな非現実的な話って全然これっぽっちも信じないことないし。

小さい頃もサンタとかがってすぐに正体が父さんだって気付いてたしさ・・・まあ可愛く無い子供だったよ。

「ごめん・・・やっぱりそういうのは信じられな・・・」

「うう・・・ひつく・・・」

「うえ!!???ちよ、あ、絢乃ちゃん!!???」

なんで君が泣くの!!???めちやくちや予想外なだけど!!!

「ふえ・・・み、瑞樹ちゃ・・・が・・・うう・・・し、信じてくれないよお」

そりゃ、信じてないけど・・・だからって泣く事（汗）  
・・・ええい！！ままよ！！

「分かった！！信じる！！信じるからさ！！だから泣き止んで？ね？」

「ほ、ほんとですかあ？・・・ぐす」

「ほんとほんとー！！」

「良かったあ」

・・・僕ってかなり情けない気が・・・

「ほんまになあ」

・・・心の声を読まないでください、紗月ちゃん。  
僕のプライバシーが！！

と、僕の主張も虚しくそんな事お構い無しと言わんばかりに紗月ちゃん話を進める。

「兎に角やなあ〜話の続きやねんけど・・・やっぱアパートに住むからには家賃を払わなアカンねんけど、ウチラ高校生には結構難しい話やる？」

「そりゃ〜まあね・・・バイトとかしないとイケないの？」

「ま、無理ではないけどなあ。せやけど、『ココ』七福荘』は別に金

を払う必要は無いねん。」

「て、事は・・・タダ!!??」

「ちゃうて。ウチラはなんや?」

「何って・・・人間?」

「当たり前やろ!人間以外の何者やねん!!じゃなくて、さっき言  
つたやろ?」

「あ、七福神だっけ?」

信じてないけど・・・とは言えない僕。

言ったら、ある人がまた目からしよっぱい液体流しそうだし・・・  
「そや。七福神ってのは人様に運を分け与える存在。つまり・・・  
それが家賃。」

「つまり簡単に言ったら・・・人様の役に立てと?」

「そやな。ウチはコレ使ってちよっくらアルバイトを」

と、陽気にブンブンとデンジャラスな矛を振り回す紗月ちゃん。  
つてかなんちゅーアルバイトしてるんだか。

「ん?でもちよっと待って?僕はどうしたらいいの?僕は七福神の  
生まれ変わりでも無いし・・・」

「あれえ?瑞樹ちゃんは弁天様と聞いていますけど?」

「え!!??弁天てそんな大それた・・・それに紗月ちゃんみたいな能力も生まれて今まで一度も使ったことも無いよ?」

「それについては後ほど説明しますです。そろそろ皆さんに瑞樹ちゃんの事紹介したいし・・・」

「あ、うん。そうだね。ココの管理人さんにも挨拶しないと・・・」

すると、紗月ちゃんと絢乃ちゃんが首を傾げて不思議そうに僕の方を見る。

「????何言ってるんですか?」

「何言ってるん??瑞樹ちゃん。」

「何って・・・だから管理人さんに・・・もしかして・・・『七福荘』にはいないの?」

「いるよ?今ココに。」

「え!!??・・・紗月ちゃん?」

と、僕が目を見つめて紗月ちゃんに向ける。

が紗月ちゃんの首が横にふるふると揺れる。

「違うの?じゃく・・・絢乃ちゃん??」

すると、絢乃ちゃんはニッコリスマイルを浮かべ・・・

「違いますよ」

「え？じゃ〜誰なの？」

と、聞くと二人は同時に一つの方に人差し指を向ける。  
その指先にいる人物とは！！

「……僕？」

すると、二人は首を横に……ではなく縦にコクコクと揺らした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5142b/>

---

僕が弁天様ッ！！??

2010年10月10日00時14分発行